

それからまた数日がたちました。雪国会津の短い夏も通り過ぎていこうとしていきます。夏の終わりを咲きほこっていた庭のヒマワリも、心なしか色あせてきたようです。豊助は書類にかこまれたまま、この数か月間のことをふりかえっています。

けさがた、西郷頼母によばれて登城すると、三家老のいる席で、『戸の口用水路修理計画書』が殿様から許可されたことを聞かされました。それに豊助は、『涯味寿長、鈴木康俊、相田啓迪、沢井次房の四人とともに、工事奉行を命ぜられ、現場監督に八田宗吉、古川伊喜右衛門があたることになったことを伝えられました。』

ぽつと、まわりが明るくなったので、気がつくど、あんどんの火をともした妻のれんが、うしろにすわってました。豊助は、妻とむき合々と静かに語りはじめました。